

冷戦が終わったとき、私たちは次の時代の新しい課題があるように考えていました。それは、国家対市民のようなマクロな権力関係よりは、個々のアイデンティティや立場の多様性に由来するミクロな権力関係が問題になるような、より複雑で、しかし確実に新しい世界の到来に思えました。教師は子ども達や若者に寄り添い、それでいながら啓蒙も支配もしない。革命ではなく、かといって伝統に固執するのでもなくしなやかに日々の現場で物事をよりよくしていくようなあり方。新しい時代の教育学はそうした行く先を示しているように思われました。たとえばガート・ビースタのペダゴジーにはそうした議論の最良の形が示されており、その価値は今でも変わってはいないはずで。

しかし、残念ながら私たちは現在、それとは別の、過ぎ去ったはずの問題群が再び頭をもたげるのを目の当たりにしているようにも思います。端的に言うると、近代化とともに獲得されてきたはずの様々な諸権利や自由が、少しずつ脅かされるような政治状況に再び直面しつつあります。フランスの政治学者、ユージェニー・メリオーによると、市場や企業を自由を拡大させる一方で個々の市民の政治的権利を弱めるような政策が、複数の国で取られる傾向にあるということです (Eugénie Merleau, *La dictature, une antithèse de la démocratie? 20 idées reçues sur les régimes autoritaires*. Le Cavalier Bleu, 2019)。

新しい専制はかつてのように統制経済を伴う全体主義国家の顔をしておらず、むしろ「市場の自由」を金科玉条に掲げつつ、巧みな様々な異論の声を封じていきます。この傾向は様々な名前で呼ばれます。たとえば、新自由主義的保守主義、新自由主義的権威主義、あるいは単に政治的な抑圧を高める側面にのみ着目して「イリベラル」(illiberal)と呼ばれることもあります。最後の表現は、億万長者でありながら中絶の権利を無効化することに熱心であった米国のドナ

ルド・トランプ政権を思い出すとわかりやすいでしょう。あるいは少し違う視点ですが、「過激中道」(extreme center)という概念もあります(酒井隆史『賢人と奴隸とバカ』亜紀書房、二〇一三年)。これは新自由主義的な市場の論理を絶対視するあまり、反論には「極左」「極右」とレッテルを貼り、政策的議論や妥協を許さないような態度のことです。いずれも、権威主義的な強いリーダーを待望する言論と親和性が高いため、民主主義を危うくする傾向を併せ持っています。

こうした社会状況の中で、教育に今いかなる課題が突きつけられているのでしょうか。それを考えることを早急に始める必要があるでしょう。それが今回の特集を考えるに至った経緯です。無論、個々の関心により見え方は異なるかもしれませんが。たとえば、高等教育では国家の介入により「学問の自由」(academic freedom)が脅かされ、冷戦期の1970年代と同様に危険な状態に後退したとの主張があります。また、大学のあるべき姿をめぐる対立も深まっています。国際人権規約で掲げられた高等教育無償化の理念があまりにも忘却され、高騰する学費が若者の教育の権利を奪っていると考えられる人々と、市場競争に勝ち抜ける学生を育てる場としての大学に関心が強い人々とは相互理解が難しい状況です。しかし、初等教育や中等教育ではまた全く違う風景が広がっているかもしれません。

以上の背景を踏まえて、次号の特集では、教育における自由／不自由がどのような状況にあるのか、どう考えていけばよいのかなどについての、洞察に満ちた論稿の投稿をお待ちします。もちろん、上記で素描したとらえ方と異なる前提に立つものや、「自由と統制」についての古典的主題に関わるものでも結構です。なお、査読の結果、特集論文ではなく自由投稿論文のカテゴリでの掲載とする場合もあります。

『教育学年報』投稿要領

1 発行予定 二〇二五年八月

オープン・レビューによる査読の上、編集委員会で採択の可否を決定します。

2 募集原稿の文字数

【タイプ① 次号テーマ「教育の自由／不自由」に沿う原著論文】

一六〇〇〇字以内。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、一四枚以内を一六〇〇〇字とみなします。なお、査読の結果、タイプ②の原著論文、あるいは研究ノートとして掲載することがあります。

【タイプ② 自由テーマの原著論文】

一六〇〇〇字以内。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、一四枚以内を一六〇〇〇字とみなします。なお、査読の結果、研究ノートとして掲載することがあります。

【タイプ③ 研究動向紹介・書評・エッセイなど】

一〇〇〇〇字以内（超える場合は応相談）。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、九枚以内を一〇〇〇〇字とみなします。

3 原稿の形式と送付先

① 「MS Word」と「PDF」の二種類（同内容）の電子データで提出してください。

- ② 原稿とは別に、日本語による概要（四〇〇字程度）を付してください。
- ③ 原稿は、論文題目、原稿の種類、投稿者の氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスをお書き添えの上、世織書房メールアドレス〈seori@nifty.com〉へお送りください。メールでのご提出が難しい場合は、世織書房（〇四五―三―七―三―七六）までお電話ください。
- 4 投稿内容は未刊のものに限りませんが、既発表の論文が部分的に組み込まれていてもかまいません。その場合は重複部分を明示し、投稿論文とあわせて参考論文をお送りください。
- 5 投稿論文は各号の採択が判明するまで、他の媒体へ重ねて投稿しないでください。
- 6 締め切り 二〇二五年二月二十五日（必着）
- 7 問い合わせ先 世織書房メールアドレス〈seori@nifty.com〉

*

一六号より教育学年報編集委員が次の方々になります。

浅井幸子（東京大学）、隠岐さや香（東京大学）、石井英真（京都大学）、仁平典宏（東京大学）、丸山英樹（上智大学）